



Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo

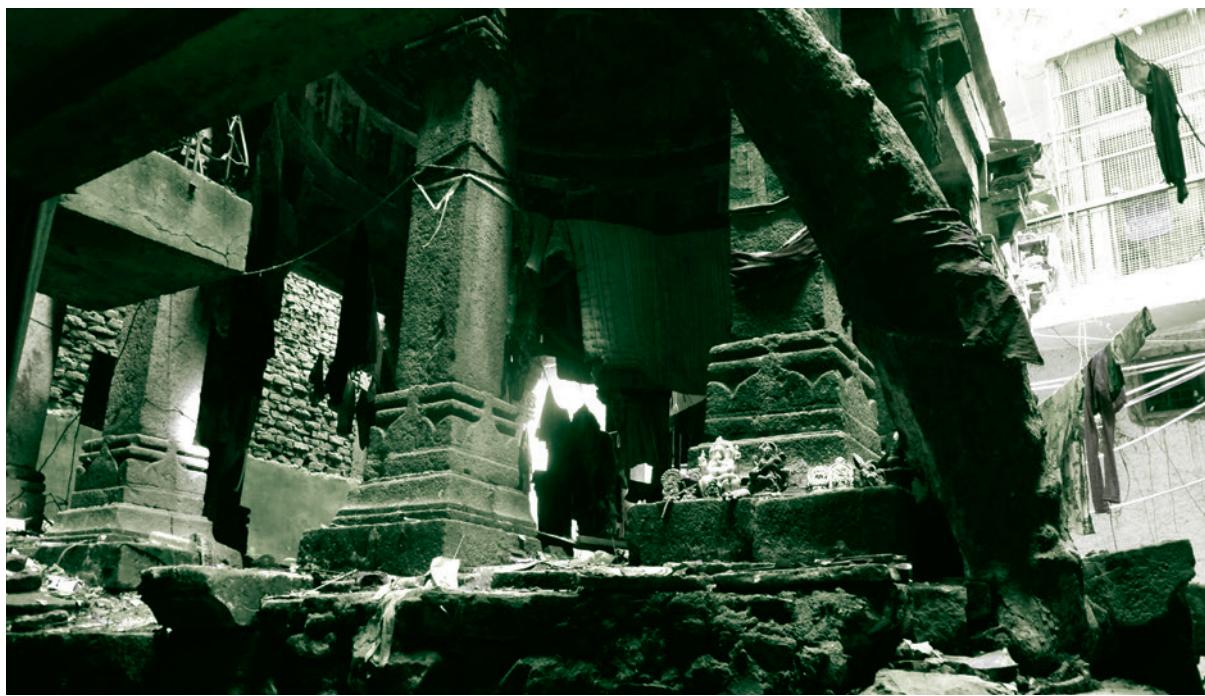
共同利用・共同研究拠点 共同研究課題の研究成果特集 第4号

学生の意識変化にみるアジアの近未来： アジア学生調査統合データ分析プロジェクト

園田 茂人

歴史都市デリーの都市開発と遺跡保存 －東京大学インド史蹟調査団の再評価からの中世インド建築史

深見 奈緒子



ズムルドブルの墓建築(T111)

一辺約7mの基壇上の柱礎に12本の柱を立て、その上にドームを冠する。手の込んだ装飾がこの墓建築の特色で、赤砂岩製の軒、青いタイル装飾、ドーム内部の漆喰浮彫から、15世紀末から16世紀初頭の建築であることが推察される。周囲は高層化し、洗濯物干し場に使われているが、住民がガネーシャなどヒンドゥーの神像を祀っていた。(2015年8月13日撮影)

学生の意識変化にみるアジアの近未来： アジア学生調査統合データ分析プロジェクト

園田 茂人

採択課題：学生の意識変化にみるアジアの近未来：アジア学生調査統合データ分析プロジェクト（H27）

3年前、筆者は本誌30号で以下のように書いた。

「今年度（注：2013年度）から、センターの機関推進プロジェクトとしてアジア学生調査の第二波調査を開始することとした。…アジアの将来を担うエリート学生たちの意識と行動を追うことは意義深いし、何より学生自身が調査のデザインから分析にコミットすることによって、多くの学びを得ることができる。アジア学生調査に関しても、2008年に実施された第一波の結果も含めた統合データベースを作る予定だが、そこでも、本プロジェクトのような実りある比較研究を進めたいと思っている」

その後、機関推進プロジェクトの一環として統合データベースを作成。2014年に別の予算を利用して獲得したミャンマー、マレーシア、インドネシアのデータも含め、第二波調査だけで4,700強、第一波調査と合わせ8,000強のサンプルを含むデータベースを作りあげた。

第二波調査を実施するに当たって、第一波調査の質問票を精査。時系列調査が必要な項目と不要な項目とに分け、2008年以降生じた現実を念頭に、新たな質問項目を加えた。具体的には、(1) 中国の台頭に関する質問、(2) 対象者の自尊心を測定する質問、(3) アジアの人びとの心理的距離を測定する質問、(4) 将来の言語学習に関する質問、(5) 日中韓の大衆文化受容に関する質問の5つが、今回新たに採用されるようになった。

プロジェクトに参加した若手研究者一部——そのほとんどがその後、修士課程に進学することになった本学の学部生である——が、統合データを用いて論文を執筆。論文執筆に当たっては、本学の授業コマを利用し、論文の書き方をみっちり指導した。こうして書きあげられた論文は『連携と離反の東アジア』（園田茂人編,2015,勁草書房）に収録されることになったが、後にプロジェクトに参加した一学生が筆者をインタビューし、その研究成果を「シノドス」に紹介したことによって、プロジェクトの概要を容易に理解できるようになっている（<http://synodos.jp/international/14150>）。

学部生が主体となって調査票を設計し、アジア7カ国でデータを集めただけでも大事業なのに、論文集まで刊行したのだから、通常なら、これで大成功となるところ。とこ

申請者 フィリピン大学ディリマン校アジアセンター・准教授 米野 みちよ

ろが筆者は、そこで終わってしまったら「飛びぬけた」プロジェクトにならないと考えた。

せっかくアジア規模でデータを集めたのだから、これをアジア各地にフィードバックし、調査の結果得られた知見をめぐって議論する必要があるのではないか。そのためには英語の論文なり書籍が出ていないと、議論さえできないではないか。2015年に始まった公募プロジェクト「学生の意識変化にみるアジアの近未来：アジア学生調査統合データ分析プロジェクト」は、こうした考えから始まった。

データ収集や成果報告会の実施の際にご協力いただいたフィリピン大学の米野みちよ先生にプロジェクト・リーダーとなっていただき、データ解釈をめぐる国際的な集会をいくつか開く計画を立てた。同時に、前回のプロジェクトに参加した学生諸君や海外で関心をもつ若手研究者に一念発起してもらい、アジア学生調査の統合データを利用した挑戦的論文を提出してもらうことにした。このあたりのモジュールは、2011年の公募プロジェクト「新しいアジア像構築の試み：アジア・バローメーターの再分析プロジェクト」と基本的に同じである。

*

では私たちは、このプロジェクトで何をしたのか。

若手研究者にアジア学生調査に興味をもってもらわないことには、そもそも挑戦的論文を書いてもらうことは不可能である。そこで第一に、アジア学生調査の対象となった地域を中心に、その研究成果を紹介しようとした。台湾大学やソウル大学との合同サマープログラム、南洋理工大学でのセミナー、本学GLPプログラムと住友商事奨学金受給者である中国人留学生との交流セミナーなどの機会を利用し、同じ問題をめぐってアジアの域内でどのような意見が見られるかについて、データを用いて解説を行ったのである。

こうした作業は、アジア学生調査に対する一般的な関心を喚起することにつながるが、通常、データを利用して論文を書こうという学生を増やすことにはならない。こちらから積極的に学生にアプローチしないといけないからである。

そこで第二に、2015年7月に高麗大学と合同でワーク



写真1 2015年7月27-8日に実施された高麗大学でのワークショップ終了後の記念写真

ショップを実施し、アジア学生調査がどのような知見を得ることになったのか、その成果を各国の研究者に理解してもらうよう——そしてその研究者が学生たちに、アジア学生調査の存在を伝えてくれるよう——にした。具体的には高麗大学（Yoon In-jin教授）ばかりか北京大学（劉能教授）、香港大学（中野嘉子准教授）、早稲田大学（中嶋聖雄准教授）、フィリピン大学（米野みちよ准教授）といった、学生調査に参加してくれた大学の教員を招聘すると同時に、『連携と離反の東アジア』に論文を寄稿してくれた大学院生（木原盾・打越文弥・園田薰）に、成果を英語で発表するよう依頼した。もともと、同種の活動を東洋文化研究所で実施しようとしていたのだが、先方が合同ワークショップを提案してくれたことにより、高麗大学の学生が多く動員できたばかりか、運営費用を折半することができ、予算執行上大いに楽になったことは特記しておきたい（写真1参照）。

第三に、フィリピン大学の米野先生の授業とタイアップし、本学の博士課程リーディング大学院プログラム「多文化共生・統合人間学」におけるプロジェクトの一環として、UTOPという本学の大総センターが開発したコミュニケーションツールを用いて共同授業を実施した。双方の学生は日本時間の午後7時に集まり、最初は筆者による「データを用いたよい論文の書き方」の講義。次に実際にデータを利用した演習を行い、参加した大学院生たちは、どのよう

な点に注意しながら論文を書いたらよいのかを習得していった。これが2015年の10月から11月にかけてのことである。

もっとも、こうした訓練はフィリピン大学アジアセンターにおける2016年2月のワークショップ“Changing Attitudes of the Students and the Future of Asia: Analysis of Asian Student Survey Integrated Dataset”を実質化するためのものであり、これが第四の活動、本プロジェクトにおけるメイン・イベントである（写真2参照）。

そこでは11本の論文が発表された。報告テーマはアジア・イメージ、アジアの地域統合、社会的距離の比較、アジアにおける対外認識の比較、アジアからみたアメリカ、東アジアのエンターテイメント・メディア、アジアにおける自国企業の選好など実にバラエティに富んでいた。これらの論文のうちいくつかがセレクトされ——その多くが第二波調査のデータ作成に関わった諸君のものである——、書きなおされたものが英語の本に収録されることになっている。現在、各執筆予定者が推敲をしている段階で、これがまとったら英文書籍として世に問われることになっている。

*

本プロジェクトが終了し、本文を執筆し始めた2016年5月23日、アジア学生調査第二波調査に参加し、データ作成から論文集に収録された論文の執筆も行った早稲田大学出身の川添真友さんが私のオフィスを訪問した。川添さんは現在、三菱総合研究所グループに勤務しているのだが、同僚を連れて、現在同グループ内の社内事業として展開しているASEAN未来像調査を実施するにあたってのアドバイスを求めて来たのである。

聞けば、ASEANの未来像を考えるにあたって若者の意識や行動に焦点を当て、実際にASEANの地域統合のために行われている努力と若者の意識・行動の「ずれ」をテーマに、具体的な提言までにもっていくような計画が進んでいるという。このプロジェクトは川添さんが主導するものではないが、アジア学生調査の第二波調査に参加した経験



写真2 2016年2月25-26日に実施されたフィリピン大学でのワークショップの風景

ゆえ、プロジェクト・リーダーからずいぶんと期待されているようで、今後、筆者との共同研究を進めていくことになるかもしれない。

振りかえってみれば、アジア・バロメーターもそうだが、データの共同利用を促進するといつても、データを作ることに関与していない研究者が十全にデータを使いこなすことはむずかしい。時々「データを使わせてほしい」という照会もやってくるが、その多くは、データの一部を切り取り、利用者が考えている枠組みでの使用に留まる。チャレ

ンジングな問い合わせの設定まで行きつかないのがほとんどである。これに比べ、川添君のようなケースが増えてくれば、データも自然とうまく利用されていくようになるだろう。

ちなみに、別途調査予算が獲得されたこともあり、2018年にアジア学生調査の第三波調査を実施することになりそうだが、そうなれば、今まで以上に深い分析が可能となる。第二波調査に参加した学生諸君が成長し、調査結果がより広く利用されるようになればと思う、今日このごろである。

(東京大学大学院情報学環/東洋文化研究所教授)

歴史都市デリーの都市開発と遺跡保存－東京大学インド史蹟調査団の再評価からの中世インド建築史

深見 奈緒子

採択課題：歴史都市デリーの都市開発と遺跡保存－東京大学インド史蹟調査団の再評価からの中世インド建築史（H27～H28）

はじめに

2015年度の本研究は、1959年から1962年に東京大学インド史蹟調査団が記録したデリーのイスラーム遺跡が、現時点でどのような状態にあるのかを踏査、記録することを主眼としたもので、『南アジアの都市と建築に見るイスラームの諸相』に調査概要をまとめた。2016年度には、その全容を東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センターの「デジタル・アーカイブ」で公開することを目指し、すでに同サイトにおいて2001年度から公開中の「インド史蹟調査団」の写真資料と、55年を挟んだ状況の比較を可能とすることを目論んでいる。

「インド史蹟調査団」は、東西14キロ南北26キロに及ぶ広域のデリーに点在する中世（1191～1526年）のイスラーム遺跡について、綿密な悉皆調査を行い、その成果を『デリー』3巻にまとめた。当時の写真や図面等の膨大な資料は東洋文化研究所に保存されている。その資料を公開したのが上記デジタル・アーカイブで、「南アジアの中世イスラーム建築史－東京大学インド史蹟調査団のデータベース」で紹介した。

デリーは、1960年代からの新興住宅地開発、1990年代の経済成長を経て、メガシティへと豹変した。近代的な住宅地としての都市域が拡大するとともに、当時の広大な荒野は緑地化され公園となった。一方で旧来の稠密市街地は高層化し、農村からの貧困流入者層のインフォーマルな住宅地形成が進行している。こうした状況の中で、中世のイ

申請者 早稲田大学イスラーム地域研究機構・
招聘研究員 深見 奈緒子

スラーム史蹟はどのような状況に置かれているのだろう。この問い合わせが本研究のきっかけとなった。

本稿では、55年間に、変わったものと変わらないものの様相を紹介し、歴史遺産を考える端緒としたい。

地図と踏査

地図を用いた踏査という点では、55年前と昨年の踏査に変わりはない。けれども、空間地理情報の普及・簡易化によって、より精度の高い空間座標を決定できるようになった点は大きな進化で、より詳細なデリー都市史を検討することが可能となった。その反面、当時の広域の地図作成が並々ならぬ努力の賜物であるということを実感した。

私たちは、現地調査に先立ち、インド史蹟調査団が作成した地図、1988年のデリー地図を参考に、まずGoogle Earth上で385件（『デリー』収録物件数）の遺構のおおよその位置に目星をつけた。Google Earthの精度はよく、直径5mあまりのドームは識別可能である。とはいえ、著名な遺跡もあるが、小さな建築は、Google Earth上で比定するのは難しい。また、先述したような都市化と史蹟の破却により、Google Earth上で位置を同定できないものもあった。

下準備のうちに現地を訪れ、思った通りに見つかったものもある。しかし稠密な住宅街では、遺構に到達するのは難しいもの多かった。地図上の位置を実際の所在に落とすのにこれほど手間がかかるとは、現地で経験するまではわからなかった。こうした手順で236件を、現地で発見す

ることができた。他にかなり荒廃が進み断片的にしか存在しないものが23件、その他の126件は、何度も周辺を探しても到達することができなかつた。もしかしたら住宅の奥に潜んでいて、今回発見できなかつただけかもしれない。けれども、所在地のあり方を検討すると、多くは大規模な住宅地開発によって破却されたと思われる。約30%の遺構が55年間に姿を消したこととなる。この事実は、55年前の資料の重要性をより明確にする。

広域都市デリー

デリーの中世イスラーム遺跡は広域に点在する。12世紀末、ヒンドゥーの城塞都市に、カイバル峠を超えて北西部からイスラーム教徒が侵入し支配権を確立、デリー・スルタナットと呼ばれる時代が始まる。16世紀初頭までに主にデリーの中南部に集中して幾つかの大規模な都城を建設し、これらは数平方キロに及ぶ広い都市であった。

もっともその姿をよく残すのは14世紀初頭に建設されたトゥグルカーバードである。トゥグルカーバードの城塞はインド考古局によって保存された観光地である。その東側に中世の市域が接し、市壁は東西2km南北1.5kmほどの台形で南西部に宮殿域が広がる。市壁内は道路や下水などインフラの未整備な稠密な住宅地に変わり、大モスクも破却された。市域内に点在した井戸も、曲折する道路と立て込んだ家並みで、今ではどこにあるのか、探すことはできなかった。これらの遺構は、すでに55年前にもかなり痛んだ状況だった。加えて、トゥグルカーバードの宮殿域は、一部の保存区域を除くと、調査が夏であったためもあるのか、人の背丈ほどの荊棘のジャングルと化していた。

こうした、大城塞都市ではなく、囲郭集落が広域に数多く点在したことでもデリーの特色で、集落にはダルガー（イスラーム聖者廟）やモスク等の中世にさかのぼるイスラーム史蹟があり、中世からの集住地の在り方を示す。首都の移転にかかわらず、中世からムガル朝時代そしてイギリス植民地時代を経て、小さな囲郭拠点は存在し続けた。55年前にすでにニューデリーの都市域の内部に取り込まれたものもあるが、現代まで小さな都市核として存在し続ける。

55年前には、こうした集落の囲壁が残存していたが、今ではほとんど確認することができない。カダム・シャリーフの大門は、かろうじて現存するが、周壁はインフォーマルな都市化の中に取り込まれた。また、集落内の特徴的なモスクは、破却され、鉄筋コンクリートのモスクに変わった。一方、モスクに隣り合う廟建築は、床が大理石に変更され、上塗りされ、高いビルに囲まれているが、55年前の形である。隣り合う中世遺構で何が保存と破却の分かれ道になったのだろう。

加えて、デリーにはほかの都市と比較できないほど多くの水利施設の史蹟が残っていた。雨季と乾季のある南アジ



写真1 ワズィーラーバードの橋、右手のトタンの下に水門は埋められてしまった。左手は柵をまわし考古局によって保存されたモスクと墓建築。

アで、支配者は、都市民や農民のために数多くの水利土木工事を手がけた。中世のデリー最北端にあたるワズィーラーバードには、モスクと墓建築に接して、橋、ダム、水門があった。現在、中世の橋は自動車が通る道として使われるが、ダムは荒廃し、水門は造成のために埋められた（写真1）。水利施設は、階段井戸のような地下遺構が多いので、半数以上が姿を消すという惨憺たる結果であった。水関係として、南アジアには非常に稀な中世のハンマーム（公衆浴場）の遺構も、所在地と目される場所は、公園になり跡形もなくなってしまったことは惜しまれる。

市街地拡大と遺跡

20世紀後半の都市域の拡張には大きく2つの方法がある。フォーマルな開発とインフォーマルな集住である。前者は、ニューデリーを計画した20世紀前半にさかのぼる。ニューデリーのバンガロー住宅地内にあるウガル・サインの井戸をみると、少なくとも20世紀前半には、宅地開発の中で中世遺構として尊重されたものもあった。1960年代からのバサント・ビホールでの住宅地開発では、墓や墓地などの中世史蹟は一掃され、公園に古材が転がっていた。無論遺跡自体の規模や状況によって、破却か保存が決定され、20世紀前半のニューデリー整備のなかで葬られた遺構もあったのかもしれない。けれども、先に紹介した希少なハンマームも1970年代に消失した。

一方、後者は、貧困者層が農村からデリーに集まり、住み着くようになった時の住まい方である。古くからあった集落が高層化し、さらにはその集落の周りに貼り付く形で住宅が増殖し、インフラは後付けのことも多い。高層化によって人がすれ違えないほどの暗い路地には、水道管やガス管などが地面に露呈する。あるいは、シャムシー・タラオの南側地区のように、仮設住居が増殖しつつある地区もある（写真2）。こうした地区では、史蹟は住宅の一部として私有化され、残っているものが多い。おそらく、中世の頑丈な組積造建築を壊すことは大変で、住居に転用することが容易だからだろう。



写真 2 シャムシー・タラオ南側の仮設住宅地区。写真奥に見えるのは『デリー』のリストにのる中世の墓建築。

公に認められた開発を通して遺構が消失し、むしろ公には疎まれるインフォーマル集住では遺構が保存されるという皮肉な結果である。

保存と活用

インド考古局の描くイスラーム史蹟の理想像は、遺跡公園である。墓や墓地、モスクなどが集中している地域もあり、こうした地域に適応されることが多い。すでに植民地時代から整備の進んでいたハウス・ハースやローディー公園などが、手本となり、モスクや墓というイスラームの宗教性を離れ、緑に包まれた中世の歴史遺産と暮らす都市としてのあり方が求められた。55年前と比べるとびっくりするほど修復が進んだ例もあった。

一方で、55年前から既存市街の中にあり、55年間に高層化が進み、考古局が保存修復した遺構は、中高層建築に埋もれた状況にある。ムバーラク・プル・コートラのムバラク・シャー・サイイドの墓建築は、鉄柵で覆われ、周囲の建物の高層化に加え、墓自体がトイレとゴミ箱のような状況である（写真3）。近傍の大モスクも、建物へのアクセスは、ゴミ箱と化した幅70センチほどの路地を通っていくしかない。

保存を目指し、修復を試みる考古局の手がけた物件には、幾つかの問題がある。第一は宗教的用途の問題である。キルキ・モスクでは礼拝は禁じられていた。宗教的な衝突を



写真 3 高層建物に囲まれたムバーラク・シャー・サイイドの墓建築。

案じての方策ながら、こうした遺跡ではメンテナンスが行き届かず、トイレやゴミ捨て場、若者たちの溜まり場となり、保存モスクに酒瓶が転がっていること也有った。インドにおいてマイノリティとしての宗教遺産にどのような保存施策を適応するのかという難しい課題である。

第2は利権、使用権の問題である。大規模な遺跡にはチョキダール（監視員）がいることが多いが、放置されているものも多い。前者でも、次第に利権の私有化が始まり、広大な遺跡公園にあるハウス・ハースのモスクでは、家財道具を運び込み、洗濯物を干し、私有地として用い、私たちが中に入ることは拒まれた。一方、後者では周りの住民によって、じわじわと私有化が進む。自分のものを置くことから始まり、考古局の看板が立っているにもかかわらず、近隣住民に外からの写真撮影をきつく断られた墓建築もあった。

緑化都市デリー

理想的な解決案のように見える遺跡公園には、落とし穴もある。デリー自体が低層の緑化都市を目指し、デリーには広域の緑地が多く設定されている。55年前の写真と比較すると、大きな樹木が多くなり、中世史蹟の周りにひろがった荒野は、緑地へと化した。

ジャハーンパナー公園で、ブッシュの中に通る緑道を歩みつつ、カラーゲンバズを探した。給水車が、緑を維持するために尾根道に散水を続けていた。「何してるの？」という問いに、55年前の写真を見せて知らないかと問うと、案内してくれた。尾根道から5mほど入ったところに、石の山ができ、ドームの破片があった。もう随分前に壊れたとのことだった。

大規模な緑化公園のジャングルに取り込まれた遺跡で、消失寸前、あるいはジャングルの中に取り残された遺跡は、数多い。緑化のためには水分が必要だけれど、過剰な水分と植物の繁茂は、500年以上を耐え抜いた組積造の建築にはむしろ逆効果なのである。

宗教

一応姿をとどめている236件の遺構のうち、考古局を始めとし公的保存されているものは135件（この範疇で宗教的に利用されているものはわずか）であり、宗教施設として利用されているものは61件、住宅など私的に利用されているものは40件である。「インド史蹟調査団」は、モスク、墓、墓地をはじめ、スルタナット期にイスラーム教の施設として建設されたものを調査の対象とした。この結果を見れば、4分の3近くの遺構はイスラームという宗教色を伴わずに保存されている。

礼拝所としてのモスクは、古い建物よりも広く機能性も高い新しい建物に建て替えられることが多い。シェイフプ



写真4 モラーダーバード・パハーリーのマドラサに改装されたモスク。生徒たちが寝て休憩している。白塗りされているが建築は14世紀のモスク。

ルのモスクを探し回り、3階建てのモスクの地下室の壁にミフラーブ壁の片鱗を探し当てた時には、発見できた喜びと、遺構の痛々しさが入り混じり、言い表せない感覚に襲われた。

一方、比較的古い遺構を白塗りするなど多少の改変は伴いながらも使い続けるのは、中世から続くニザーム・ディーンなどの「ダルガ」、近年の現象である「マドラサ」などの宗教団体が多い。小・中学生程度の男子学生を集め、多くは寄宿制でイスラームを教育する施設が多く「マドラサ」と呼んでいた。近隣に住む学生を集めるマドラサ、田舎から出てきた学生のマドラサ、あるいは孤児を集めたマドラサなどさまざままで、中にはマドラサから午前中には普通学校に通う生徒もいた。モラーダーバード・パハーリーの2つのモスク建築は、白塗りされ、マドラサとして使われていた（写真4）。

もう一つ、宗教という既成概念からだけでは理解は難しいけれど、イスラームの墓建築がヒンドゥー祠堂、あるいはシーカ教のグルドワラとして転用され、すでに40年ほどが経過していた。ズムルドプルの北西にあるランガール・ハーナと呼ばれる墓建築のドームの下に、天蓋付きのベッドがおかれ、ヒンドゥーの信仰を集める老人が横たわっている姿には、すべてを飲み込み、消化するインドの文化のあり方を象徴しているような気がした。イスラーム教から他宗教への転用という視点で考えるのではなく、聖なるものあるいは有難い場としての持続と考えたほうが良いのかもしれない。

私有化への過程とその持続

インフォーマルな集住地での遺構のあり方、公的保存の中で起こる私有化への一歩など、歴史的建築がまさに私有化されつつある状況を紹介した。

一方で、55年前の調査の時に、住宅として使われているために詳細な調査ができなかったと断り書きのある物件が、今も変わらず私有化されているものもある。こうした物件では、写真撮影や聞き取りは、居住者の意思に左右さ

れる。けんもほろろに追い返されことが多いけれど、どうぞどうぞと見せてくれることもある。

1370年代の建立と言われるハーネ・ジャハーン・ティランガニーの墓建築は、直径10mあまりの8角形の墓室に周廊を回した大規模な廟で、15から16世紀に好まれた8角形周廊墓の最初例として、建築史上とても重要な建物である。『デリー第1巻』には「現在では、この墓の廻廊の部分に、幾世帯かの家族が住みついており、建物の多くの個所に改変がほどこされている。ヴェランダやドームにも雑草が生い茂り、自然の荒廃にまかされている。わたしたちは、1962年の2月に住民の許しを得て暗やみの墓室内に入ることができたが、墓石はよく保存され、香煙すらただよっていた。しかし、このような建築史上に重要な建造物は、将来十分に保存の措置が講じられる必要があろう。」と記される。今日もこの姿は変わらず、むしろ周廊部分が2階建てに改装され、一部の家は屋上にも家具を設え、住み熟されたともいうべき姿であった。しかし中央の墓室は、55年前と同様の姿であった。

もう一つ、ズムルドプルは、古くからの集住地で小高い丘にある。ここには4つの墓建築が集まっている。エメラルドを意味するズムルドという名前にも、惹かれるものがあり、一挙四得と安易な考えで調査地を訪れた。ところが、発見の難易度は高く、集落を行ったり来たりして、やつと一つの墓建築を見つけた。墓建築に続く住宅を所有する主人から、「私有財産なので内部を見せることはできない、その代わりに他の墓を案内してあげよう」と言われ、言葉の不自由な一人の男性が派遣され、あたかも自分の庭のようにズムルドプルを案内してくれた。他の家の中を通り越さないとたどり着けない物件もあり、案内人なしには到底たどり着けなかった。牛小屋として使われているもの、共同洗濯干し場になっているもの、建物内に取り込まれたものなど、あまり良い状況ではないが、姿を保っていた（写真5）。わたしたちが簡単な図面を探る間も、彼は誇らしげだった。古い街区で、住民の間に古い建物としての共通認識があることは、とても重要なことである。

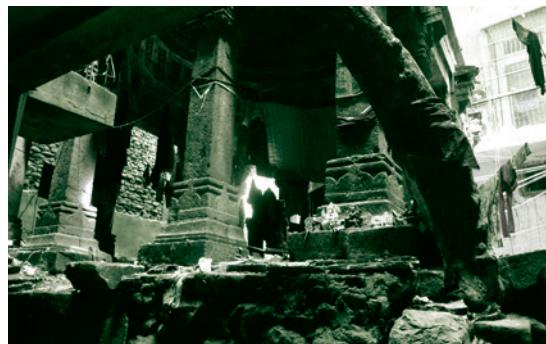


写真5 ズムルドプルの墓建築。洗濯物干し場に使われているが、周囲の住民がガネーシャなどヒンドゥーの神像を祀っていた。

私たちができること

わたしたちは、リキシャも利用したけれど、毎日10から20キロを歩き、55年前の調査のあとを辿った。その踏査から、とりとめもない調査の断片を書き綴った。2015年夏のデリー調査の位置付けは、55年前のデータを研究資料とし、遺跡の地理情報、今回撮影した写真、あるいは採取した図面などによって、今後さらなるデリーの都市史、インドのイスラーム建築史の研究へと発展する可能性へつなげた点は、一つの成果といえよう。

本来の歴史遺産の意味とはなんだろうか。単に古いからとておかなくてはいけないということでは、長続きはしない。ゴミ箱になりながら考古局によって保存されている遺跡は、都市の邪魔物になっているのかもしれない。ただ邪魔物だからといって壊してしまったら、もう2度とはもとには戻らない。

時間の推移を伝えるものと毎日一緒に暮らすことは、人間としての存在になんらかの影響を与え、自己アイデンティティにつながっていくのではないかだろうか。インドでは、宗教という側面も重要だけれど、デリーという地に残された人々の歴史としての遺産として、理解を進めていくべきであろう。もちろん、こうした状況をきちんと捉え、公共的な保存政策を実践していくことも重要ではあるが。

今回の調査では、研究チームの仲間達、現地のディヴィアイ氏を初めとするINTACH (Indian National Trust for Art and Cultural Heritage) のメンバー、日本の大学の学生達、現地で対応してくれた人々など多くの協力を仰いだ。これらの人々に感謝申し上げるとともに、デリーの中世イスラーム史蹟が今後、末長く持続し、デリーに住む人々の心の拠り所となることを望む。

山本達郎・荒松雄・月輪時房『デリー』第1巻～第3巻、1967年、1969年、1970年、東京大学東洋文化研究所

深見奈緒子「南アジアの中世イスラーム建築史－東京大学インド史蹟調査団のデータベース」

『イスラームとインドの多様性NIHU Research Series of South Asia and Islam 4』 人間文化研究機構地域間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」、2014年、pp.27-54

深見奈緒子「インドの中世イスラーム建築史－2015年夏のデリー調査」『南アジアの都市と建築に見るイスラームの諸相NIHU Research Series of South Asia and Islam 9』 人間文化研究機構地域間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」、2016年、pp.1-38

宍戸克実「2015年時点で存在するデリー中世遺構目録(代表例)」『南アジアの都市と建築に見るイスラームの諸相NIHU Research Series of South Asia and Islam 9』 人間文化研究機構地域間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」、2016年、pp.39-66

村松伸、深見奈緒子、山田協太、内山愉太『2メガシティの進化と多様性』東京大学出版会、2016年

(日本学術振興会カイロ研究連絡センター・センター長)

センター便り

・平成28年度漢籍整理長期研修

昭和55年度、センターの前身である東洋学文献センターから実施してきた漢籍整理長期研修は、今回で37回目となりました。前期平成28年6月6日から10日まで、後期は平成28年9月5日から9日までの計2週間実施しました。大学図書館等の職員11名が参加しました。受講後それぞれの所属機関で、研修の成果を大いに發揮し活用されることと思います。講師として、大木康センター教授、さらに所外10名の専門家にご協力いただきました。この場をかりて厚くお礼申し上げます。今後も毎年実施していく計画です。

所外委員

横手 裕 大学院人文社会系研究科・文学部教授
岩月 純一 大学院総合文化研究科・教養学部准教授
丸川 知雄 社会科学研究所教授
山口 英男 史料編纂所教授
加納 啓良 東京大学名誉教授

所内委員

高見澤 磨 教授 東アジア第一研究部門
(兼)センター比較文献資料学
平勢 隆郎 教授 センター造形資料学分野
(兼)東アジア第一研究部門
中島 隆博 教授 東アジア第二研究部門

(オブザーバー)

板倉 聖哲 教授 (兼)東アジア第二研究部門
(兼)センター造形資料学
大木 康 教授 センター比較文献資料学
(兼)東アジア第二研究部門
長澤 榮治 教授 西アジア研究部門
(兼)センター比較文献資料学
名和 克郎 教授 汎アジア研究部門
(兼)センター比較文献資料学
園田 茂人 教授 (兼)新世代アジア研究部門
(兼)センターアジア社会・情報
松田 康博 教授 汎アジア研究部門
(兼)センターアジア社会・情報

センタースタッフ

高見澤 磨 (たかみざわ おさむ) センター長
センター比較文献資料学分野 中国法研究
平勢 隆郎 (ひらせ たかお) 副センター長
センター造形資料学分野 中国史
板倉 聖哲 (いたくら まさあき)
センター造形資料学分野教授 東アジア絵画史
大木 康 (おおき やすし)
センター比較文献資料学分野教授 中国文学
長澤 榮治 (ながさわ えいじ)
センター比較文献資料学分野教授 中東地域研究
名和 克郎 (なわ かつお)
センター比較文献資料学分野教授 文化人類学
園田 茂人 (そのだ しげと)
センターアジア社会・情報分野教授 比較社会学
松田 康博 (まつだ やすひろ)
センターアジア社会・情報分野教授 アジア政治外交史

明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター報 第36号

発行日 2017年2月28日
編集・発行 東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号
電話 03-5841-5839 (直通)
FAX 03-5841-5898
E-mail ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp
URL <http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp>